

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告（2011年8月29日提出）

## 1. 派遣生の基本情報

氏名：瀬尾文子（せおふみこ）  
所属：東京大学大学院人文社会系研究科美学芸術学研究室（教務補佐員）  
派遣形態：平成23年度夏学期個人派遣 PD

## 2. 研究課題名

ベートーヴェンのオラトリオ《オリーブ山上のキリスト》；19世紀前半プロテスタント圏ドイツにおけるその受容

## 3. 派遣先での活動

### （1）派遣先の基本情報

国：ドイツ、都市：ベルリン、研究機関：国立図書館  
研究上のアドヴァイスを受けた主な人物：ゴットフリート・マッテーイ（元教会音楽家、ベルリン在住）

### （2）派遣期間

出発日：2011年6月6日、帰国日：2011年8月15日、総日数：71日間

## 4. 主な研究成果

### （1）当初の計画の概要

19世紀前半のプロテスタント圏ドイツで、ベートーヴェンのオラトリオ《オリーブ山のキリスト》が  
いかに受容されたかを調べる。当時の資料から演奏の場の実態を明らかにした上で、新聞雑誌に載った  
作品評や、演奏に関わった人物の書簡や著作物など、この作品をめぐる言説にあたる。その際とりわけ  
注目するのは、この作品の斬新なキリスト像が当時の人々にいかに受けとめられたかである。さらに、  
この作品の影響下に作られた別の受難音楽についても、作曲の経緯や演奏状況を調査する。

### （2）実際に達成された成果

研究の対象地域をベルリンに、また対象期間を1810～30年代に絞り、本作品の演奏状況を調べた。  
当時の音楽新聞に記録が残っている演奏は4回あり、そのうちの3回について詳細が明らかになった。  
1812年、1816年の演奏はとりわけ興味深く、1800年以来、宮廷楽長 B.A.Weber が国立劇場  
(Nationaltheater)にて「悔悛の日 Busstage」に開催していた慈善演奏会の中で行われたものだった。  
教会でも聖週間でもなく演奏されたこの「カトリック」の受難楽の宗教性を、当時の人々はどう捉えて  
いたのか。この問いに対し、二方向からの追究を試みた。第一は、この出来事を歴史的文脈において解  
釈するために、様々な背景的事柄を把握することである。具体的には、ベルリンの当時の教会音楽事情  
(特に受難節の音楽)、教会の社会への影響力(1817年の Union に向けた動きを中心に)、慈善演奏会  
の歴史、市民音楽団体(特にジングアカデミー)の理念と活動、そしてベルリンにおけるベートーヴェ

ン受容について調査した。第二は、当時広く読まれた音楽新聞に寄稿していた批評家や、ベルリンで活躍した重要な音楽家の書き残したものを読解することである。今回の調査では特に、1800～32年のベルリン・ジングアカデミー指揮者 C.F. ツェルターが、本作品への評価を次第に変えていったことが、J.W.v. ゲーテ宛書簡から読み取ることができたのが収穫だった。

### (3) 今後の研究展望

ベルリンにおける演奏状況から、本作品が教会外の宗教性の機能を何らかの形で果たしていたことは明らかであり、その実態を論究することは近代の宗教観の解明につながる。宮廷の力、「宗教的寛容」の伝統とその結果、サロンの発展といったベルリンという都市の特殊性を充分踏まえつつ、19世紀前半の躍動する市民社会の一側面を本研究を通じて明らかにしていきたい。まとまった成果は、現在執筆中の博士論文の一部として、また、先行研究の乏しい数々のトピックに関しては、音楽学会、美学会にて順次発表していく予定である。